

|     |         |     |                  |    |    |     |   |
|-----|---------|-----|------------------|----|----|-----|---|
| 科目名 | 文化情報論特講 | 担当者 | ホサカ トシコ<br>保坂 敏子 | 期間 | 通年 | 単位数 | 4 |
|-----|---------|-----|------------------|----|----|-----|---|

【科目概要】

|         |   |      |   |
|---------|---|------|---|
| 目的      | <p>文化情報専攻での研究活動の基盤として、ヒト・モノ・コトの移動が盛んなグローバル時代に文化研究・言語教育研究を志す者に求められる文化リテラシーと研究リテラシーの涵養を目的とする。本年度は、異文化間コミュニケーション、異文化間教育の領域における「文化」の捉え方を理解し、近年提唱されている「超文化コミュニケーション力」「複言語・複文化主義」「相互文化的市民性」についてクリティカルな検討を試みる。また、「翻訳」を多様な文化間コミュニケーション活動のメタファーとして捉える「文化翻訳」の議論とその事例に触れ、文化の往還と混淆のプロセスについて理解を深める。これを踏まえ、自分自身が目指す文化研究、言語教育研究を明確化していく。その過程で、文化研究と言語教育研究に必要な基本的な研究方法の知識や研究倫理に関する認識の獲得も促す。</p>   |      |   |
| 到達目標    | <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 修士論文の作成に必要な先行研究の検索方法や研究倫理、それぞれの分野の研究の進め方について理解し、自律的に遂行できるようになる。</li> <li>2) 文化研究と言語教育研究の基盤となる「文化」の捉え方、メタファーとしての翻訳の概念について理解し、近年の論考について、クリティカルかつ具体的に自分の考えを論じたり、議論に参加したりできるようになる。</li> <li>3) テキストや他の履修者との対話を通して「文化」に対する自己認識を問い直し、自分自身の目指す研究の方向性について意識化できるようになる。</li> </ol>  |      |   |
| 学修方法    | <p>★大学院の初年次教育にあたるため、初年次に履修すること。</p> <p>&lt;通信授業（在宅学習）2単位分：基本教材1&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 前期：基本教材1を精読し、参考図書等を参照して、レポート課題1をまとめる。</li> <li>2) 後期：レポート課題1とスクーリングを踏まえ、レポート課題2をまとめる。</li> </ol> <p>&lt;スクーリング 2単位分：基本教材2&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・年に2回、夏期（7月）と冬期（11月）に3日間の集中面接授業を実施する。原則的に必修科目履修中に夏期と冬期のいずれかに必ず1回、原則として全日出席する。</li> <li>・通信による在宅学習に対するアクティブラーニングの機会と位置付け、研究方法の基礎に関する対面の講義のほかに、文化情報専攻の教員によるオムニバス形式の講義、基本教材2の視聴と討論、基本教材の著者等を招いたビジターセッション等を実施する。受講した内容を基にレポートを2本まとめる。</li> </ul> <p>★レポートについて、Manaba Folio の掲示板を使ったピア・ラーニング（各受講者が書いたレポートについてお互いにコメントをし合い、推敲する協働活動）を実施する。基本教材1のレポート課題1と2は、教師の添削指導を受けて改訂したものをピア・ラーニングにかけ、その結果を踏まえて改訂したものを最終稿とする。</p> |      |   |
| スケジュール  | <p>&lt;通信授業（在宅学習）&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 前期：レポート課題1 初稿〆切6月30日⇒最終稿〆切 9月21日（前期レポート〆切日）</li> <li>2) 後期：レポート課題2 初稿〆切11月30日⇒最終稿〆切 2017年1月16日（後期レポート〆切日）</li> </ol> <p>&lt;スクーリング（対面授業）&gt; 夏期（7月16日～18日）／冬期（11月18日～20日）</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) スクーリング・レポート課題1：スクーリング1週間後（初稿のみ）</li> <li>2) スクーリング・レポート課題2：スクーリング終了の1か月後（初稿のみ）</li> </ol>   |      |   |
| 成績評価    | 種別  | 割合   | 評価基準  |
|         | 通信授業（在宅学習）  | 50 % | レポートの内容（論旨、構成、引用文献の妥当性、独創性等）40%<br>参加度（ピア・ラーニング、レポート添削への対応等）10%       |
|         | スクーリング  | 50 % | レポートの内容（論旨、構成、独創性） 課題1：10%、課題2：30%<br>参加度（討論、発表）10%<br>★出席率は60%以上とする。 |
| 履修者への要望 | <p>・基本教材1のレポートは、初稿から最終稿にいたるまで、教師のフィードバックによる書き直し、ピア・レスポンスによる推敲、最終稿の完成と段階的に進めること。上述したレポート〆切日より提出が遅れた場合は、成績が低くなることに留意すること。</p>   |      |   |

【レポート課題】

| 基本教材 1 (通信授業/在宅学習用) |  |
|---------------------|--|
| 教材の概要               | <p>(1)著者名： 佐藤慎司・熊谷由理編<br/>教材名： 『異文化コミュニケーション能力を問うー超文化コミュニケーション能力をめざして』<br/>(ココ出版, 2013) ISBN: 978-4-904595-46-6 3,600円+税</p> <p>(2)著者名： 西山教行・細川英雄・大木充編<br/>教材名： 『異文化間教育とは何かーグローバル人材育成のために』<br/>(くろしお出版, 2015) ISBN-13: 978-4874246733 2,400円+税</p> <p>教材(1)は言語教育(日本語・国語・英語)に携わる研究者が「異文化間コミュニケーション能力」の概念について再考したものである。「文化」「コミュニケーション」「能力」の概念の歴史の変遷と問題点を明らかにし、「超文化コミュニケーション能力」という新たな視点を示している。<br/>教材(2)は、グローバル時代に、共に生きる社会を構築するための異文化間教育をめぐる、日本、フランス、イギリス、カナダの研究者が論考したものである。言語教育におけることば・文化・アデンディディの捉え方や、今後言語教育が目指す方向性を提示している。</p> |
| 参考図書                | <p>細川英雄・西山教行 編 『複言語・文化主義とは何かーヨーロッパの理念状況ら日本における受容文脈化へー』(くろしお出版, 2010年) ISBN:978-4-87-424505-7 2,400円+税</p> <p>マイケルバイラム著 細川英雄監修 『相互文化的能力を育む外国語教育ーグローバル時代の市民性形成をめざして』(東京大学, 2015)ISBN: 978-4469245967 2,800円+税</p>  |
| 履修上のポイント            | <p>第三の文化や相互文化的能力の提唱など、文化の捉え方が問い直されている現在、文化研究・言語教育研究に何が求められるのか、「私」は何を目指すのかについて、各自の研究領域でそれぞれの方向性を模索していただきたい。<br/>また、レポート作成過程でのピア・ラーニングを通じて考察を深めていただきたい。</p>  |
| レポート課題1             | <p>基本教材1や参考図書を参考に「文化」の捉え方の変遷を整理した上で、「超文化コミュニケーション」「複言語・複文化主義」「相互文化的市民性」の中から1つ選び、概念をまとめて、内容についてクリティカルに自分の考えを論じる。(3000字~4000字)<br/>留意点： 要点を分かりやすくまとめて、論考すること。</p>  |
| レポート課題2             | <p>基本教材1や参考図書、スクーリングの基本教材2やオムニバス講義の中から、自分の研究に関係する論考や事例研究を1つ採り上げて内容を要約し、それに関連付けて自分の研究テーマを提示し、「私」は何を目指すのかについて論じる。(3000字~4000字)<br/>留意点： 自分の研究テーマ、研究目的を具体的に示しながら、論を進めること。</p>   |

| 基本教材 2 (スクーリング用) |  |
|------------------|--|
| 教材の概要            | <p>著者名： 井上健, 古賀太, 呉川, 近藤健史, 高綱博文, 椎名正博, Dorsey, John T., 松岡直美, 保坂敏子<br/>教材名： 『国際シンポジウム「文化翻訳が拓く異文化間コミュニケーション」報告書』<br/>(非売品, pdfで配布) ならびに、映像資料(非売品, 配布なし)</p> <p>2016年2月22日に総合社会情報研究科主催で開催された国際シンポジウムの報告書である。比較文化、歴史学、言語教育に携わる研究者が、「文化翻訳」をキー概念に、それぞれ研究した成果と各分野の事例を示すものである。</p> |
| 参考図書             | <p>(1)アンソニー・ピム著 『翻訳理論の探求』(みすず書房, 2010年) ISBN:978-4-62-207518-9 5,000円+税</p> <p>(2)二通信子, 大島弥生, 佐藤勢紀子, 因京子, 山本富美子 『留学生と日本人学生のためのレポート・論文表現ハンドブック』(東京大学出版会, 2009) ISBN-10: 4130820168, 2500円+税</p>   |
| 修上のポイント          | <p>オムニバス授業や基本教材2, 参考図書を通して「文化翻訳」の事例を知り、理解を深めること。</p>   |
| レポート課題1          | <p>スクーリングの専攻別講義の概要を要約し、それについて意見をまとめる。(1000字~1500字)</p>   |
| レポート課題2          | <p>夏期： 各分野の研究手法の講義や参考図書(2), スクーリングでの自身の研究計画の発表と討論を踏まえて、<b>研究計画書</b>をまとめる。(3000字~4000字)<br/>冬期： 各分野の研究手法の講義や参考図書(2), スクーリングでの自身の研究経過の発表と討論を踏まえて、<b>研究経過報告書</b>をまとめ、指導教員のレビューを受けた上で提出する。(3,000字~4,000字)</p>  |